

## ずいそう

# 富士登山

小川 隆



「日本人なら一度は登ろうじゃないか、まして静岡に住んでいるなら尚更だ。」こう言って富士登山を職場で提案したのは私が静岡県浜松市に転勤して1年余りが過ぎ新天地での環境にも慣れた2000年の初夏の頃だったと記憶しています。上司の強いリーダーシップのもと、早速参加希望者が募られ以来、当社の静岡在住のメンバーを中心に毎年企画される恒例行事になっています。

古来より信仰の対象とされてきた富士山、江戸時代には富士参詣は大きなブームにもなったと言われています。静岡に限らず日本の意外なところから眺められたりしますが、地元の富士市、特に東名高速富士インターチェンジ付近から見る威容は何度見ても感嘆の声が漏れてしまう程の美しさ荘厳さ、日頃抱くことの無い畏敬を我々に与えます。登山口は首都圏からアクセスが良く人気がある北側から登る吉田口（河口湖口）、富士山の南側を最短に一直線に登る富士宮口（富士山表口）、東側から登りどこからでも御来光を望める須走口、もっとも距離が長く下山に豪快な砂走りが魅力の御殿場口の主要4コースがあり、行程も夜中に5合目を立ち頂上で御来光を迎えるプラン、中腹の山小屋に泊まり体を高度に慣らして頂上を目指すプラン、早朝出て日帰りで戻って来るプランなど時間と体力に合わせて選択可能でリピーターも多い様です。

提案者である私が初登頂を果たしたのは、それから7年が過ぎた一昨年、2007年7月になってしまいました。最初に提案した年はトレーニング中に張り切りすぎて足の肉離れで断念、翌年は膝の古傷再発、3年目は家庭の用事、4年目は子供と遊んでいてアキレス腱断裂。挑戦する気持ちとは裏腹に実現出来ずに2004年に大阪に転勤となってしまいました。何時しかメンバーから声も掛からなくなり「富士山は眺める山だ」と強がっていましたが一昨年偶然に大阪から参加する者がいたので一念発起、挑戦することにしました。しかし過去の経緯からメンバーからは相当信用をされていなかった様です。49歳という年齢、日頃お酒は欠かさないが満足に体を動かすことの無い生活、そして何より「今度こそ断念する訳にはいかない、何としても成功させなければ名誉回復の機会は二度と訪れない」と思い慎重に準備を進めることとしました。登山

靴は提案した時に購入した物があったのでそれを使うこととし、それ以外特に膝の古傷を守る為のサポータータイツ、膝用テーピング、2本ストック、ザック、レインウェア、ガイド本、手袋、果ては携帯酸素まで数万円で用意をし、トレーニングも運動不足の体を壊さない様ゆっくり行っていきました。まただぶついた体を2ヶ月で4キロ程減量して本番に臨みました。

7月第4週の土曜の朝は快晴。朝5時に富士市内を地元の同僚が運転する車で出発。富士宮口5合目に6時前には着きましたが夏休みに入っていたこともあり駐車場は満杯。已む無く30代の若手3人が我々中高年7人を降ろし4合目まで下って登って来ることにしました。澄んだ空気の中から一直線にこれから登って行く頂上付近まで見通せ、やる気と不安が交錯する中出発しました。6合目まで約30分、新7合目まで1時間、遥かに見渡せる天上天下のパノラマを臨みながら順調でした。7合目を過ぎたあたり（標高3,000m）から砂や溶岩の剥き出しになった地面で植物が殆ど見られなくなり、息の切れるのははっきりと判るようになりました。8合目で休憩していると妻からメール（ナント下から頂上まで携帯の電波は切れません）。朝のニュースで富士登山の様子が放映されていて、それをみた息子が「お父さんは無理だろう」と言っているとの情報、有難う、俄然やる気が湧いて来ました。しかしながら8合目を過ぎるといっそう傾斜がきつくなり15分も歩かないうちに立ち止まる様になり視野に入っている頂上にいっこうに近づきません。それでも小学生低学年と思える子供たち、世界各地からの人々、そして旭日旗を先頭に70代以上と思われる敬老会の人々、家族からのメールに励まされ9合目、9合5勺と進み目前に頂上が迫ってきました。最後はあえぐような状態でしたが仲間が笑顔で浅間大社奥宮のある頂上で迎えてくれました。出発から約5時間、吐く息は白いが寒さを感じない爽快な天候にも恵まれ登頂成功。無事登れた安堵と久々に味わう達成感、仲間感謝しつつ生ぬるいビールで乾杯、味わうおにぎりは最高でした。今年もシーズン到来、御来光を拝む再登頂の意欲が湧いてきました！